Bull. Mukogawa Women's Univ. Humanities and Social Sci., **45**, 127－133(1997)
武庫川女子大紀要（人文・社会科学）

江戸時代の漂流者の「好奇心」について

石井もも子，高田　康孝
（武庫川女子大学生活環境学部生活情報学科）

A Study on the Curiosities of Persons Adrift on the Sea in the Edo Era

Momoko Ishii and Yasutaka Takada

Department of Human Informatics,
School of Human Environmental Sciences,
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663 , Japan

Abstract

The purpose of this study is to examine the curiosities of persons adrift on the sea in typical six stories of drifting in the Edo era. They drifted on the sea and they god to strange land. When they stayed there, they caught a glimpse of different world in Japan. Then they interested in"culture of food", "manners and customs", "climate". The curiosities of persons on the see in the Edo era are same modern Japanese.

緒　言

漂流記とは一般に，「難船，漂流ののち異国に漂着したり，外国船に救助されたのち，さまざまな運命をたどり，異国の文明に接し，幸運にも帰国できた人々の記録の総称」[*1)]である．本研究では，江戸時代の漂流記に記されている異国の文明に接した時の「驚き」に注目し，漂流者が，どのような事柄について興味をもち，好奇心を表しているかについて，その特徴を分析する．また，現代人の海外旅行と比較し，考察する．

江戸時代の漂流記について

周りを海で囲まれている日本は，昔から海難事故が多い．特に江戸時代は，「海流と気象，鎖国の影響，経済の発達，日本船の欠陥」[*1)]の理由から，海難事故が多く発生し，同時に，数多くの漂流記が生まれた．その理由は，帰国できた漂流者は，「自らの意志ではなかったとしても，一応は国禁を犯した容疑者となるわけで，幕府はこれを取り調べ，漂流の経過や外国事情やそこでの生活について供述書をとり」[*2)]加えて，「取り調べ役人がつくる漂民の素朴で簡単な口述書では満足できない人々は，公的に或いは私的に漂流者の話を書きとどめ，詳細精密な記録をつくりあげ」[*2)]たからである．これらは，鎖国の体制をとる幕府のもとでは，公にではなく，写本という形で広く知られるようになった．漂流記は，江戸の庶民にとって，数奇な運命を体験した漂流民への興味を満たすだけでなく，海外事情を知る唯一の手がかりであったと思われる．「海外見聞録は，鎖国令という海外渡航を禁ずる法令のもとでは，漂流という偶発事故の結果としてしか生れ得なかった」[*3)]のである．

方　法

江戸時代に記された漂流記のうち，広く知られ，比較的物語性のあるものの中から，『韃靼漂流記』[*4)]『馬丹漂流記』[*5)]『吹流れ天竺物語』[*6)]『磯吉物語』[*7)]『船長日記』[*8)]『満次郎漂流記』[*9)]の6点を選び，漂流記の中で，漂流者が「驚いた事」，「興味をもった事」を中心とする記述を抜き書きした．これらは，いずれも，

『石井研堂これくしょん江戸時代漂流記総集』に収録されている．今回，使用した漂流記の概略を Table 1. に示す．

それらの抜き書きの内容を分類し，その事柄に対する，漂流者の感想が記されている部分に注目して，そこに表現された情緒的反応を類型化したうえで，それらを数量化し，分析の対象とした．

Table 1. 漂流記の概略年表

出　典	漂出年	帰国年	船　名	出身地	関わった人船	主な漂流民名
韃靼漂流記	1644	1646	藤右衛門船 （廻船）	越前三国	朝鮮女真族 中国人	藤右衛門
（経緯）ロシア領ポシェット港に漂着．襲撃を受け，奴隷となるが，清の役人に保護され，北京に送られ，厚遇される．建国中の清国を実見する．その後，朝鮮に送られ，厚遇される．対馬に送られ帰国．						
馬丹漂流記	1667	1670	孫右衛門船 （廻船）	尾張 知多郡	マレー系原住民 中国人	孫左衛門
（経緯）ルソン島の北方，バタン諸島に漂着．掠奪されて奴隷となる．手製の舟を造って脱出．舟山列島普陀山に着き，長崎貿易の経験をもつ中国人より，日本までの航路を教えられ，五島列島に至る．自力で帰国．						
吹流れ天竺物語	1764	1771	伊勢丸 （廻船）	筑前 志摩郡	ミンダナオモロ族 ボルネオ華僑 オランダ人	孫七
（経緯）フィリピン群島の最南部，ミンダナオ島に漂着．掠奪にあい，奴隷にされる．後に転売され，ボルネオの中国人商人の奴隷となる．数年間使われたのち，主人の善意により，オランダ人の手にわたされ，帰国．						
磯吉物語	1782	1792	神昌丸 （廻船）	伊勢	ロシア人	大黒屋光太夫 磯吉
（経緯）アリューシャン列島アムチトカ島に漂着．土着人や，ロシア人に保護され，カムチャッカ半島に渡る．オホーツク，ヤクーツク，イルクーツク等を経て，ロシアの首都に行き，女帝エカテリーナ2世に謁見した．その後，ラクスマンに伴われ，根室に上陸．						
船長日記	1813	1816	督乗丸 （廻船）	尾張 名古屋	イギリス船 ロシア船	重吉 音吉·半兵衛
（経緯）1年4ヶ月の漂流の後，英国商船に救助され，アラスカのシカト港に寄港．カムチャツカ半島に渡り，ロシア船に送られ，ウルップ島沖迄送られ，小舟で上陸． （江戸時代の漂流記中，文学的完成度において随一と評価されている）						
満次郎漂流記	1841	1851	漁船	土佐	アメリカ捕鯨船	中浜万次郎
（経緯）無人島の鳥島に漂着．アメリカ捕鯨船に救助される．ホノルルに向かう．その後，アメリカへ行き，学校教育を受ける．再度，ホノルルに向かう．琉球沖で，ボートを降ろしてもらい帰国． （漂流記としては市販をみた最初の木版本）						

結果及び考察

1．漂流者の「好奇心」の一般的傾向

1.1.）「好奇心」の内容分類について

各漂流記から，抜き書きした記述の内容を筆者はさしあたり，「衣服」「食」「住居」「風習」「風土」「生活」「言葉」「制度」「人外見」「街並み」「芸」「その他」の12項目に分類した．抜き書き記述の一部を Table2. に示す．「風習」と「生活」の違いは，「風習」は人に関する風俗習慣や行為を，「生活」は日常生活に使われる道具など物をとりあげている点にそれぞれ注目した．それらの出現比率をあらわした結果を Table3. に示す．

Table 2. 抜き書き記述（一部）

No.	出　典	分類	国	事　　柄	感　　想	感情	備　考
1	舩長日記	言葉	イギリス	言葉通じず	拝むより外なし	困難	
3	舩長日記	衣服	イギリス	服は羅紗の筒袖を着て	いとおそろしきさまなり	恐	
16	舩長日記	食	イギリス	その鯨こそ豚なれ，かまぼこは牛なり	今は神々はのぞまれぬぞよ	嫌	肉食
21	舩長日記	住居	サンタ･バーバラ	かくて屋敷の内に入れてみれば，土間なり	―	―	
22	舩長日記	食	サンタ･バーバラ	銀沢山にて，出る器物多くはしろがねなり	―	―	ごちそう
37	舩長日記	風土	シカト	六月も雪ふる	数千里へだたりたる事しるべし	驚き	寒さ
52	舩長日記	芸	ロシア	摺銅，太鼓，琵琶を胡弓摺物にて摺る．	このはやし，誠に面白し	面白い	音楽
66	舩長日記	食	エトロフ	米は格別の祝ひ日などには，少しづつ堅きかゆの様にたきて食	―	比較	米
97	磯吉物語	衣服	アムチトカ	鳥の羽根杯綴付候着類	はなはだ見苦しき体	嫌	
109	磯吉物語	制度	アムチトカ	(ラッコ)の革を土地者ども剥取り，運上致し候	則ち年貢なり	比較	ラッコの革
115	磯吉物語	住居	ロシア	家作は残らず唐松を用ひ候	―	―	
120	磯吉物語	食	ロシア	米，大豆これ無き国故，味噌，醤油の類，これ一切無く候	―	―	
131	磯吉物語	生活	ロシア	かるたこれあり	模様の様子は大きに違い候	比較	トランプ
143	韃靼漂流記	制度	韃靼	罪の軽重に依りて数を定め，敲き申し候よしにて，	―	―	
167	韃靼漂流記	生活	韃靼	上下共に刀はさし申さず候	―	―	刀
177	韃靼漂流記	食	韃靼	酒はせらうち[焼酎]にて御座候	粟にて作りもうし候	比較	酒
189	韃靼漂流記	街並み	北京	屋形作り町屋，透き間もなく御座候	日本にて大なる堂寺の如くに	比較	
191	韃靼漂流記	街並み	北京	物商売の所は，	日本の借店の如く	比較	
200	韃靼漂流記	風習	北京	正月の祝ひ	大かた日本に替わり申さず候	比較	正月
217	馬丹島漂流記	風習	フィリピン	年寄候へば，親にても打殺し申し候	―	―	
219	馬丹島漂流記	言葉	南京	様子尋ね候へども	詞通じ申さず，埒明き申さず	困難	
220	馬丹島漂流記	人外見	南京	大将がましき人は，髪をかわら[唐輪]にゆい	物々しく相見へ申し候	恐	
239	馬丹島漂流記	風習	フィリピン	正月，盆という事なし	―	―	
243	馬丹島漂流記	風習	フィリピン	嫁取り婿とりといふ事あり，	―	―	婚礼
263	吹流れ天竺物	言葉	ボルネオ	はじめ砂の上に日本人と書きて見せれど	頭を振りて知らざる様子	困難	
268	吹流れ天竺物	風習	ボルネオ	船に乗りて漕出し，石をくくり付け，海中へ内入れける	わが身も暫くこそあらめと，泪を押へて帰りける	悲	弔い
305	吹流れ天竺物	風習	カイタニ	年始来客，その外一家の交わり	日本の町内に同じ	比較	正月
308	吹流れ天竺物	風習	カイタニ	町内をふり商ふ小商売人の	次第に慣れて何をならすと何なりと心得	―	物売りの声
311	吹流れ天竺物	芸	カイタニ	歌舞伎芝居来りければ･･･	踊りに似たり，狂言なり	比較	
315	吹流れ天竺物	生活	カイタニ	寝間には年中蚊帳を張る	―	―	
329	満次郎漂流記	食	アメリカ	豚の干し肉あぶりたるをくらひ	―	―	肉食
334	満次郎漂流記	風土	ハワイ	寒暑なく，春秋とも，	日本の9月のごとし	比較	
344	満次郎漂流記	生活	ハワイ	雨具なくして，雨天の時は家より出ず	―	―	
356	満次郎漂流記	生活	アメリカ	貴人けん付の筒もつ	―	―	
361	満次郎漂流記	風習	アメリカ	葬式のことは	多分ワフの国に同じ	比較	葬儀

これにより，抜粋した369箇所のうち漂流者の関心の一般的な傾向として，「食」に対しての記述が19.2%と最も多く，ついで，「風習」の18.7%，「生活」の12.2%，「風土」の11.9%の順になっていることがわかる．

① 「食」の記述の内容をみると，共通していたものの一つに，米に関係した記述が，全71箇所中13箇所(18.3%)ある．『馬丹漂流記』では，「米五升ほどくれ」たことに対して，「三年目に米と申すもの見申し候」と喜んでいる．『韃靼漂流記』では，「米御座無く候」と淡々と述べている．このように，記述内容は様々であるが，日本の主食である米に対する執着がわかる．次いで多かったのが，肉食に関したもので，11箇所みられた．特に肉食に対しては，驚きや嫌悪をはっきりと表現している記述が多い．例えば，『舩長日記』では，豚を殺して調理する様子をみて，「いかなる事にかと，恐ろしく思いながら，念仏を唱へて見居れば，」などという具合である．しかし，帰国に際して，「久しく異国の肉食になれたるを，俄かに米をのみ諸したる故にや，腹もちあしくなりたり，」という記述があり，すっかり肉食に馴れてしまっている様子もうかがえる．また，外国の地で珍客として迎えられ，比較的厚遇されている『韃靼漂流記』『磯吉物語』『舩長日記』では，食卓の上に並べられた食事を「ご馳走」と称して，食事の内容や，食器類，テーブルマナー等を細かく記述している．また，『吹流れ天竺物語』において，ボルネオの「器を一つにして，手につかみてこれを食う」習慣に対して「誠に牛馬を飼ふに異ならず」と感想を述べている．その他，「食」に関して日本の食事と比較したり，同様であると述べているものも多い．

② 「風習」と「生活」の記述の内容をみると，漂流者によって，かなり視点が違うように思われる．これは，関わった国での扱いの違いと漂流者の個性との理由が考えられる．ほぼ共通してみられたのは，「風習」では正月やお盆といった年中行事に関心を示している点，また，葬儀や婚礼の様子を細かく記述している点である．

③ 「風土」の記述内容は，日本と比較した，気候についての記述が，全44箇所中14箇所(31.8%)と多くみられる．また，草花や木といった植物に対する記述が10箇所ある．『舩長日記』では「六月も雪ふる」事に対して，「数千里へだたりたる事しるべし」とあり，また，『吹流れ天竺物語』では，「見慣れぬ草木」を見て，「何れ日本に遠かるべし」と日本との「風土」の違いから，漂流地と日本との遠さを実感しているのだと思われる．

④ その他，全体の出現比率は，さほど多く無かったが，共通しているものに，「言葉」「人外見」の記述がある．異国の人にはじめて出会ったとき，「言葉」が通じず，「外見」が見慣れない様子であることをすべての漂流記で記述されている．そして，異国での生活が長くなるにつれて，「詞も大かた聞き知り申し候」と，有る程度の会話が可能になっていく様子がみられる．

Table 3. 分類別抜き書き記述の出現比率

出典	衣服	食	住居	風習	風土	生活	言葉	人外見	制度	街並み	芸	その他	総計
韃靼漂流記	4	13	1	14	9	2	5	4	6	7	2	4	71
	5.6%	18.3%	1.4%	19.7%	12.7%	2.8%	7.0%	5.6%	8.5%	9.9%	2.8%	5.6%	
馬丹島漂流記	2	12	3	7	5	2	2	4	0	3	0	2	42
	4.8%	28.6%	7.1%	16.7%	11.9%	4.8%	4.8%	9.5%	0.0%	7.1%	0.0%	4.8%	
吹流れ天竺物語	7	11	3	18	12	7	6	3	0	3	1	0	71
	9.9%	15.5%	4.2%	25.4%	16.9%	9.9%	8.5%	4.2%	0.0%	4.2%	1.4%	0.0%	
磯吉物語	2	7	2	3	6	12	3	4	1	1	3	0	44
	4.55%	15.9%	4.5%	6.8%	13.6%	27.3%	6.8%	9.1%	2.3%	2.3%	6.8%	0.0%	
舩長日記	6	19	6	20	6	11	15	4	2	1	3	3	96
	6.3%	19.8%	6.3%	20.8%	6.3%	11.5%	15.6%	4.2%	2.1%	1.0%	3.1%	3.1%	
満次郎漂流記	4	9	2	7	6	11	1	4	0	1	0	0	45
	8.9%	20.0%	4.4%	15.6%	13.3%	24.4%	2.2%	8.9%	0.0%	2.2%	0.0%	0.0%	
総計	25	71	17	69	44	45	32	23	9	16	9	9	369
	6.8%	19.2%	4.6%	18.7%	11.9%	12.2%	8.7%	6.2%	2.4%	4.3%	2.4%	2.4%	

1.2.）「好奇心」の情緒的反応について

つぎに抜粋した369箇所に表現された情緒的反応の出現比率をTable4.に示す.

表より，記述に対しての情緒的反応は，「驚き」「困難」「恐れ」「嫌悪」「興味」の順に多い．しかし，情緒的反応を全く表現していないものが220箇所，全体の59.6%をしめている．また，抜粋した記述に対して，冷静に日本のものと「比較」している箇所が，68箇所あり，それらをあわせると情緒的反応の記述がないものが全体の78.0%にのぼり，情緒的反応が意外に少ないことがわかる．

これは特に，幕府の取り調べ役人が作成した官製記録に顕著にあらわれている．一例を挙げれば，帰国直後に作成された官製記録の『督乗丸魯国漂流記』は，12ページにもみたないもので，情緒的反応の記述はほとんどみられない．一方，6年後には，同じ漂流をとりあげた『舩長日記』が113ページにわたる作品として世に出ている．これは，「江戸時代の全漂流記の中，文学的完成度が随一の作」[*10)]と評されている漂流記である．漂流記のなかで漂流者が接した異文化での生活は，困難であり，またドラマチックな体験のはずである．しかし，漂流記の多くは文学的な物語としてより，むしろ記録としてに重点が置かれて，感情を表に出さず，見聞した事柄だけを忠実に伝えようという作者の意図が少なからず働いている様に思われる．

Table 4. 情緒的反応別抜き書き記述数

出典	驚き	困難	恐れ	嫌悪	興味	喜び	好む	悲しみ	美しい	その他	比較	なし	合計
韃靼漂流記	2	1	0	1	1	0	1	0	0	0	21	44	71
											29.6%	62.0%	
馬丹島漂流記	0	2	1	1	2	1	0	0	0	0	6	29	42
											14.3%	69.0%	
吹流れ天竺物語	4	2	4	1	2	0	2	3	0	2	7	44	71
											9.9%	62.0%	
磯吉物語	1	2	0	5	0	0	0	0	0	0	10	26	44
											22.7%	59.1%	
舩長日記	8	9	7	3	5	2	0	0	2	2	15	43	96
											15.6%	44.8%	
満次郎漂流記	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	9	34	45
											20.0%	75.6%	
合計	16	16	12	11	10	3	3	3	3	4	68	220	369
出現率(%)	4.3%	4.3%	3.3%	3.0%	2.7%	0.8%	0.8%	0.8%	0.8%	1.1%	18.4%	59.6%	

2. 漂流者の個性

2.1）内容分類の出現比率にみる個性

つぎに，Table 3.の各漂流記と，総計の出現比率を比較する．差があるのは，「生活」に関する記述が，全体では12.2%あるのに対して，『韃靼漂流記』では，2.8%，と少なく，逆に，『磯吉物語』では，27.3%，『満次郎漂流記』では24.4%と多い．また，「制度」に関する記述が，全体は，2.4%なのに対して，『韃靼漂流記』では，8.5%と多いことがあげられる．

『韃靼漂流記』は，政治的な関係上，厚くもてなされており，万里の長城や寺などをみてまわったりしている．彼らは，人々の「生活」に注目するよりも，物見遊山的な色合いが強い「好奇心」をあらわしている．また，建国中の清国を実見していることから，鎖国中の日本の役人にとって，その「制度」が，興味深い事柄であり，それらに注目した記述が多くみられる．これらのことにより，他の漂流記との比率違いが生じたと考えられる．

また，『磯吉物語』，『満次郎漂流記』の漂流者は，帰国に10年以上かかっており，他の漂流者に比べて，

海外での生活が長かった事が，「生活」に対しての記述が多い原因の一つであると考えられる．

しかし，それ以外には，たいして大きな比率の違いはみられない．これらのことにより，生まれも育ちもことなる漂流者が，共通の視点で海外を見聞していることがわかる．彼らが同じ時代の「好奇心」を共有していたのだと思われる．

2.2）情緒的反応の違いによる個性

これら6点の漂流記の内，『舩長日記』の重吉と，『吹流れ天竺物語』の孫七は，外の漂流者に比べて，魅力的であった．『舩長日記』の重吉は，1年4ヶ月もの海上漂流に耐えた強靱な精神を持っている．また，「余り彼等の言ふままにして，弱きさまを見せたらば，日本へは帰すまじと思ひて，成りたけ人々の気を取りていながら，折々は事にふれて日本の気しやうを現はし，」とあり，日本人としてのプライドをもって外国人と接している様子がうかがえる．加えて，重吉は，兵隊が整列する姿を見て，趣があり「美しい」と表現したり，意志の疎通ができず，勘違いして，悔し涙をながしたりしと，感情を表にだした記述が多い．『吹流れ天竺物語』の孫七は，漂着した国で略奪にあい，仲間と離ればなれになって，奴隷となっている．よって，そこでの見聞は，実生活者として「米は一升に付き銭一文位」とお金の価値を記述していたり，町中を歩く物売りのかけ声に対して，「次第に馴れて何をならすと何なりと心得」たりと，日々の生活に根ざした記述が多い．また，仲間の屍が石にくくりつけられて海に流されるのを見て，「わが身も暫くこそあらめと，泪を押へて帰りける」と「悲し」んだりしている．Table4. をみると，情緒的反応のない記述が，『舩長日記』の60.4%，『吹流れ天竺物語』の71.8%と，外に比べて少ない．このことから，重吉と孫七が感情豊かに表現され，物語性の比重が大きいことが，彼らに対して特に魅力を感じた一因であると思われる．

まとめ

現代人の海外旅行と，江戸時代の漂流による海外見聞の大きな違いは，漂流が，偶発事故であるため，(1)望んで行く国ではないこと，鎖国のために(2)その国の予備知識がほとんどないこと，(3)帰国の可能性が未確定であることなどがあげられる．それらから生ずる不安や困難さは，容易に推察できる．

現在の海外への観光旅行は，日本に帰ることが前提にある．その上で，ある国へ憧れ，何らかの目的をもって，その国を訪れ，海外の見聞を楽しむ．そして，帰国に際して，旅行がもっとながく続けばいいのにと感じたり，再度，海外を訪れたいと感じる．一方，江戸時代の漂流者たちは，帰国は全く未確定であるため，漂流記の端々に帰国を切望している記述がみられる．彼らは，偶然生じた異文化での生活を体験し，そんな，全く予備知識も無い困難な中でも，始めてみる海外見聞を楽しんでいる様子もみられる．ここに記された漂流者たちは，偶発事故によって漂流を余儀なくされたのであるから，特別な人々ではなく，無作為に抽出された民衆であったと言える．すなわち，漂流者が見聞きした事柄，漂流記によって語られている事柄は，江戸時代の一般民衆が目にした海外であり，彼らが示す「好奇心」は，江戸時代の一般民衆が示す「好奇心」であると思われる．そんな困難ななかで漂流者は，『吹流れ天竺物語』では，近所で婚礼があると聞いて，「さらさら帰国の思ひはなし，咄しの種とは思はねど，隣家の事故，行って見物す，」と好奇心をあらわに婚礼の様子を細かく記している．『舩長日記』では，助けてくれたイギリス船の船長に，帰国を目前にして，「我に伴ひてイギリスへ来れかし，南京，広東，天竺，紅毛，その外さまざまの珍らしき国々を見せて，七年めには必ず日本へ帰らしめん，」と言われ，帰国を切望していたにもかかわらず，「珍らしき国々めぐり見んも，中々によかるべしと思ひなりて，」と好奇心で少し心を動かしている．その「好奇心」は，現代にも通じる物があると思われる．海外旅行のガイドブックにもご当地料理「食」や「風習」「風土（気候）」についての情報は欠かせない．しかし，知識としての情報の有無に関わらず，異文化を実体験する事への「好奇心」や，異文化に接して生じる「驚き」は，現代も昔もかわらずにあったと思われる．

参考文献

1）国民百科事典11，平凡社，（1979）

2)池田　晧編，日本庶民生活資料集成　第五巻漂流，三一書房，pp.3(1968)
3)春名　徹，世界を見てしまった男たち，文藝春秋，pp.10(1981)
4)山下恒夫，石井研堂これくしょん　江戸漂流記総集　第一巻，日本評論社，pp.96–129(1992)
5)山下恒夫，石井研堂これくしょん　江戸漂流記総集　第一巻，日本評論社，pp.172–191(1992)
6)山下恒夫，石井研堂これくしょん　江戸漂流記総集　第二巻，日本評論社，pp.112–157(1992)
7)山下恒夫，石井研堂これくしょん　江戸漂流記総集　第三巻，日本評論社，pp.124–140(1992)
8)山下恒夫，石井研堂これくしょん　江戸漂流記総集　第三巻，日本評論社，pp.220–366(1992)
9)山下恒夫，石井研堂これくしょん　江戸漂流記総集　第五巻，日本評論社，pp.212–240(1992)
10)山下恒夫，石井研堂これくしょん　江戸漂流記総集　第三巻，日本評論社，pp.220(1992)
11)谷川健一，海と列島文化別巻　漂流と漂着·総索引，小学館(1993)